

「鉄瓶に鉄の霰」 堀米 秋良

墓洗ふガダルカナルと読めるまで

霊長類ヒト科人類被爆の日

渡り鳥望遠鏡を通り抜け

啄木鳥や森の鼓動の恙なく

戦争は畳の上に敏雄の忌

伏して泣く仰け反って泣く涅槃かな

玉碎は昭和の歴史すみれ草

囃されてお天道さまも花に酔ふ

てのひらに載る一句集不死男の忌

叩いても鳴らぬラジオと暑い夏

芋の露触れなば落ちむ触れずとも

遠吠えは狼の血か雪月夜

鷹化して鳩日の丸は海を越え

籠枕から息の根にかよふ風

汗臭し馬に蹴られて死んだ筈

幽霊の十人十色盆の寺

古摩羅は手に睡たしや十三夜

ふぐと鍋夕日はいつも波の上

木枯のあと大いなる計がひとつ

月の夜の厨に十三の寒蜩

風垣して十三の湊のありとのみ

さくら湯の花一輪の日の出かな

辛夷咲く岩手の神は子沢山

鉄瓶に鉄の霰ややませ吹く

四畳半畳の上の原爆忌

みちのくは判官鬣貞葛の花

見返ればやっぱり美人雪女郎

裏口にむかしの土の春の泥

英霊はみな土の下桜咲く

早起きは曾祖父ゆづり朝桜

隴夜は駱駝の背で涉りたし
人間は星を食ふ虫霾ほこり
亀鳴くといふ俳諧の世はうらら
文鎮のくろがね重き梅雨入かな
放屁して馬の春愁埒もなし
玉の汗搔きたし遠くまで歩き
ラジオから世界のニュースタ端居
ほぞの緒は土の下なり雲の峰
青畳踏めば足裏にみみず鳴く
ほとばしる水に力や竹の春
胃の腑まできれいに落ちし洗ひ飯
色鳥の色とりどりの番かな
一室にくぐもる紫煙癩祭忌
くちなはの縄一卷を推し量る
みちのくは一山三文栗ひろふ

縁側に座ればわれも柿日和
白障子三尺開けて人を恋ふ
黄落や筆舌夙に衰ふる
天網に引つ掛りたる鴟の贅
夕日いま終焉のとき干大根